

病院で気が重い。  
特に産婦人科は。

なんていうか、明暗がハッキリ分かれてる。幸せと不幸せがグルーブ分けされてて居心地悪い。油と水みたいに、平行線の空気が二層になってるのだ。

待合室は清潔で快適、緑色のソファアは弾力があってプリーツスカートに包んだお尻がほどよく沈む。

産婦人科に来るのは初めてだから他と比べてどうこう言い辛いけど、ソファアの島々の間にマイナスイオンを醸し出す観葉植物がセンスよく配置されて、存外雰囲気は悪くない。

それも周りを見なければの話だ。

木製のラックには絵本や週刊誌、ひよこクラブだかたまごクラブだかの育児雑誌が大量に挟まれて、幸せそうな若い女の人を読み耽ってる。大きく膨らんだお腹の妊婦さんが楽しそうにお喋りする横で、まだ幼稚園にも行つてなさそうな男の子が指をしゃぶってる。

反対側のソファアにはプリンカラーの髪によれたセーターを着たギャルっぽい人や、暗い顔で俯くうちのママと同じ位の人がいる。

「ごめんねサチ、無理言つて付いてきてもらつちやつて。」

あたし一人じゃ来にくくてさ……」

隣の声に振り向く。同じクラスの友達のさなが、申し訳なさそうにうなだれてお腹をさする。私は「別に。ダチのよしみつしよ」と首を振る。

「だいじよぶ？ お腹」

「うん……ううん。クスリ飲んだんだけど全然きかない」

「体質に合わないんじゃない？」

「だつて始まった頃からずつと飲んでるんだよ？」

「耐性ができちゃったとか」

「そうかな……そうかも。詳しいことは診てもらわなきゃわかんないけど」

ほつとしたように一息、感謝のまなざしで見上げてくる。

「あんがとねサチ。こんなことあんたにしか頼めない」

「さなの生理が重い知つてっし」

「ちゃんと診てもらわなきゃ思つてたけど誤解されんのやだし……うちのガツコの人とか先生とかさ、入るとこ見られて変な噂広がるのいやじゃん」

「さな真面目ちゃんだし、ちゃんと説明すりや大丈夫っしよ」

「説明すんのがやなんだつて」

それはわかる。

生理不順を診に来てもらいにきたなんて、多感な女子中学生の口から弁解するのは荷が重すぎる。

さなとは小学校からの長い付き合いだし、体育の時間もお腹をさすって辛そうに見学してるのを知ってるから、「放課後付き合っつて」と思い詰めた顔でお願いされた時も、「いいよ」と軽く引き受けた。

私は友達から借りた漫画の単行本を膝において首を傾げる。

「てかさ。うちの人に付いてきてもらうんじやだめなの」

「共働きでどつちも帰り遅いし……親連れてこんなトコ出入りするの見られたら恥ずかしい、もつと大ごとになる」

「そんなもんか」

「けど一人じゃ心細いし……その点サチなら帰宅部で暇だし、実は頼まれたら断れないイイ奴設定だから狙い目かなっつて」

「わたしや消去法か」

「ごめん、ツンデレ設定に言い直す」

「そこじゃねえ」

友達やめるぞコイツ。

「ちがうちがう、そうじやないつて。サチつてほら、何が起きても動じなさそうじゃん？ クラスでも浮いてるつてゆーか……あ、もちろんいい意味で」

「いい意味で浮いてるつてなに。教祖的な？」

「いちいち突っ込まないでよ」

「空気読まないつて言われてんのは知ってる」

「マイペースでかつこいいじゃん。まわりに流されず我が道を行くスタイル」

まあ、それはよく言われる。自慢じやないが空気を読まないことにかけては小学生の頃から一家言ある。

空気は読むんじやない、吸うものだ。おいしければおいしい。

ぶつちやけ病院に付いてきてほしいと拝み倒されて面食ったが、生理不順を診てもらいにくだけと判明し、通学路からは外れるけどまあいいか、とちよつと寄り道気分で同伴して現在に至る。

私はださいセーラー服の生地を摘まんて指摘する。

「一回家帰つて着替えてきたほうがよくない？ 制服のまんまじや学校バレバレで悪目立ちだよ」

「サチの気が変わらないうちに来てほしくて」

「そんなフギリじやねーし」

「あたしのびびりがでないうちに……」

「なんか言つてくるヤツいたらぶつとばしてやるのに。全治一週間程度を目安に」

「アグレッシブにバイオレンスな思想説くの反対」

「んじや全治三日」

「頼る人まちがえたかなあ……でもありがと」

さなは内気で引つ込み思案だ。そんな彼女に婦人科の初診はハードル高い。中学生の女の子はまず場違いだし、知り合いに見られたら非常に気まずい。

いや、最大の問題点は別にある。

「……婦人科と産婦人科セットの医院つきやないなんて紛らわしい」

身に覚えもないのに妊娠なんて疑われたらたまつたもんじゃない。

一応婦人科と産婦人科の診察室は分かれてるみたいだけど、ロビーで待つてるぶんにはどつちがどつちだかわからない。ネガティブ思考のさなはまた悪い病気がでたみたいで、平べったいお腹をさすり憂鬱げに嘆く。

「はあ……病気だつたらどうしょ。子宮がんとか卵巣がんとか婦人科系のヤバイヤツ」

「悪い方に考えたつてしかたない」

「赤ちゃん産めなくなつたら……」

「子ども好きだもんね」

「サチもでしょ。さつきからきよろきよろして……赤ちゃん抱っこしてるひと多いもんね」

「三か月検診とか産後の相談とかあるんじゃない？ よく知らんけど。もつと言つちやうけど、そんな人目気にすんなら婦人科オンリーのトコ行けばいいじゃん」

「耳鼻科と耳鼻咽喉科みたいな関係じゃないの？ だつたら喉も見てくれる方が安心感くない？ 薬屋さんよかドラッグストアのが色々そろつてお得だし」

「選び方の基準が雑」

「だつて〜お腹痛くてもう一日だつてじつとしてらんない……」「大丈夫だつて」

「他人事だと軽く言うなあ……」

背中を叩いて励ませば呆れ半分にぼやくも、ほんの少しだけ表情が明るくなる。

「次、高尾さーん。いらつしやいますか高尾さーん」

「あ、はい！」

受付に苗字を呼ばれ、緊張しまくつたさなが反射的に腰を浮かす。

「廊下を真っ直ぐ行つて右の診察室にお入りください」

看護婦さんの説明に従つて進みかけ、私を振り向いて「じや」と手を振る。

私は「ん」と顎を引き、胸を張つていつてこいよと同胞を送り出す。

さちではできるだけ周囲と目を合わせず、きびきび歩く看護婦さんに誘導されて、白く清潔な廊下を進んでいく。

ソファアを埋めた女の人が、奥へ消えていくさなの背中を

チラ見して内緒話。

「あの子、中学生くらいでしょ」

「大人しそうなのにね」

「できちやつたのかしら」

「親御さんはどうしたの？ 隣はともだち？」

「一人で行かせるなんて無責任な彼氏よね」

うるさいババアども。陰口は胎教に悪いって知らないのか。

私は憤慨し、こわもて自慢の三白眼でぎろりと睨んでおく。

一体どんな顔してたのやら、私と視線が絡んだ女の人たちは

はそそくさと顔を伏せ、おのおの雑誌や私語に戻る。

恥ずかしいことをしてるとって自覚はあつたみたい、よかつ

た。

「ふん」